
蒼空の息吹

遠州梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼空の息吹

【Nコード】

N2001T

【作者名】

遠州梟

【あらすじ】

昭和二十年。サイパンより飛来し、帝都爆撃するB29編隊に対抗する日本陸軍航空隊空中勤務者のお話。

その日はいつになく雲の少ない日だった。高度八千メートルの高空。もし人がその高さまで上がることができたのならその深き青色に、ともすれば吸い込まれていきそうな感覚を味わうことができらるだろう。このような美しい空が、かつて血まみれの死闘が繰り広げられた空の戦場であったことを誰が信じようか。しかし、それは実際にあつたことなのだ。日米両軍の、未来ある幾多の若者達がこの空でその生命を散らせていった。それは、太平洋戦争後期のことであつた……。

太陽光を反射し輝くものがあつた。銀色に輝くそれは鋭い機首を空へと向け、上昇している最中であつた。それは、見たものに鋭い印象を与える戦闘機であつた。三式戦闘機。大日本帝国陸軍の戦闘機であり、日本軍唯一の水冷発動機を搭載した戦闘機である。

その三式戦闘機は首都防空を主任務とする飛行部隊の所属であり、この日も侵入してきたB29邀撃の為に調布基地を出動したのだ。

勿論出動したのは一機だけではない。目を転じれば、十機近い三式戦闘機を確認することができる。合計十二機。一個飛行隊の三式戦闘機が、この空に浮かんでいるのである。各機の塗装は統一されておらず、銀色のジュラルミン地肌を晒したものもあれば、濃緑色でまだらに迷彩を施したものもある。迷彩は決まった模様はなく、整備員達がスプレーで乱雑に描いたものだ。また、機体下面を除いて濃緑色一色で塗られた機もある。そんなてんではばらばらな塗装の各機が同じ部隊の所属だと言うことを示すものが、垂直尾翼に描かれた部隊章だ。その部隊章から、彼らが帝都上空を守る陸軍飛行戦隊の所属であると言うことが分かった。

『こちらながと、ながと。かもくじら三十、みやこ東進中』

陸軍航空隊・小原将彦軍曹は愛機の中で、無線電話に入ってくる調布基地の作戦室からの通信を聞いていた。“ながと”は調布作戦室の呼び出し符号。“かもくじら”はB29である。つまり無線電話は「調布作戦室より、B29三十機帝都へ向け東進中」と言っていることになる。

敵近し。

操縦桿を握る手がかたかたと震える。武者震いである。ふっと息を吐き、小原は武者震いを静めた。酸素マスクから吐き出した吐息が微かな音を立てて漏れ出した。

高高度ともなると酸素は必然的に薄くなる。酸素マスクは必須装備だ。高度四千より装着するこのマスクは高度計と連動して四千を超えたところで自動的に酸素を供給するようになっていた。

息を吐き、武者振るいを静めた小原の心の中には闘志がみなぎっていた。小原は右やや後方に位置する僚機の柳瀬徹軍曹を見やっただ。柳瀬は小原と目が会つと、力強く頷く。小原も頷き返し、正面に目を向けた。

この日小原達以外にも、いくつかの部隊が邀撃機を空に上げているはずだ。が、二人のところからはそれが見えない。すぐ左を見れば仲間達は見受けられる。だが、他の飛行部隊からの邀撃機は目を凝らしても見つけることができない。

俺達だけってことはあるまいに。どこにいるんだかな。

恐らくこの空どこかにいるのだろう。まあ、見えないものを見つめる必要もあるまい、と小原は味方探しを止め、索敵に戻る。無線はこくこくと近づくB29の情報を伝えてくる。もう見えてきてもおかしくない頃だ。と、遠くに見える富士山の周囲。その空の色がちよつと違う。小原はそちらをじつと見る。きらりと何かが光った。来た、B29だ！

B29の堂々たる編隊が小原の目に映り始めた。

「かぜ1、かぜ1、こちらかぜ8、かぜ8。敵機認む」

小原は直ちに無線電話で敵機の発見を通報した。そして、翼を振

つて隊長機にも合図を送った。小原の左斜め前。編隊の一番先頭を飛ぶ三式戦闘機、迷彩模様と垂直尾翼を真っ赤に塗るといふ、派手で特徴的な塗装の隊長機もB29を認めたらしく、翼を振って答えた。

『ながと、ながと。こちらかぜ1、かぜ1。敵機発見。攻撃に移る』
本日の邀撃隊長にして、小原の所属する飛行戦隊の隊長大林少佐が無線電話で基地に報告。続いて、“我に続け”と部隊を率い、B29編隊に向かう。小原達は大林機に続いてB29に向かった。

小原は前方に転々と見えるB29の編隊を睨みつけた。これまでも散々B29相手に邀撃を行ってきたし、小原はこれまで二機のB29を確実に撃墜した実績を持つ。部隊で合計すれば恐らく二十機は軽く越えるだろう。それでも、やはりB29は手ごわい相手であると思っていた。B29は防弾性能が高く、十分な防御火器を搭載している。その為撃墜が非常に困難だ。その上高高度性能が高く、一万メートルに上がられると日本軍の戦闘機では対応が困難になる。水冷の三式戦闘機はまだいい方だ。空冷発動機よりも高高度での性能低下が比較的少ないから。それよりも厳しいのが空冷の一式戦闘機や海軍の零式艦上戦闘機などである。これらの機ではとてもではないが一万メートルでは戦えなかった。

しかし、それでもやらなくてはならない、と小原は思う。小原だけではない。柳瀬も、そして小原達の部隊の面々も、いや、日本軍全軍の操縦士達がそう思っていた。例え大きなハンデがあってもやらなければならない。何故ならば、B29の目標は日本の都市。そこには大勢の人々が暮らしている。そこに爆弾やら焼夷弾やらを落とされるわけにはいかないのだ。

小原達は徐々にB29に近付いてきた。ちょうど相對する位置関係で、こちらの高度はあちらよりもやや高い。目測百メートルほどだ。この高度の高度が小原らに与えられた数少ない好条件である。

百メートル高いその高度から急降下し、B29に一撃を加えるのだ。一撃離脱戦法。B29の防御火器の弾幕をすり抜けて攻撃するに

はそれが一番なのだ。B29がぐんぐんせまる。小原はごくりとつばを飲んだ。小原は酸素マスクを確認した。ちゃんとついでいないような気がしたのだ。酸素の量が少ない。勿論小原の気のせいだった。小原は緊張しているのだ。もう何度も経験していることだ、じきに平気になる、と小原は自分に言い聞かせる。そう、まもなく戦いが始まる。酸素のことなど頭から吹き飛ぶくらい猛烈な戦いが。『ながと、ながと、こちらかぜ1。ただいまより攻撃』
無線から聞こえる大林の声にはっとする。敵編隊はもう足元だ。どれにかかるか。

小原はまず獲物を検分する。幸い敵は大勢。より取り見取りという奴だ。と、編隊を眺めていたら、大林機が僚機とともに敵編隊に突入していくのが見えた。大林が僚機と共に向かう先は先頭を飛ぶB29。なるほど隊長同士でやり合う訳だな、と小原は一人納得する。大林は三十度くらいの角度で降下していく。どどん接近していく大林機とB29。下手をすれば衝突しかねない。だが、B29への射撃はかなり近距離で行わなければならない。そうでないとB29の防弾性ゆえ、致命傷は与えられないのだ。

正面上空より接近してくる三式戦闘機に対し、B29が銃撃を始めた。一機だけではない。三十機のB29からの撃ちだされた弾丸が、大林機に殺到する。それでも大林はめげることなく、突入を続ける。B29が至近距離に迫る。ここからなら外れない、そう思えるほどの近距離で、大林機は射撃を開始した。弾はB29の左翼内側のエンジンを射抜いた。そして、そのまま降下してB29の後方に離脱していく大林機。僚機もほぼ同じ部分を撃つていき、大林機に続いて離脱していった。エンジンを撃たれたB29はエンジンから黒煙を噴出し、ぐらぐらとゆれている。大林らの攻撃はうまくいった。いつしかエンジンから火が出始め、先頭を飛んでいたB29は編隊から落伍し始めた。

よし、俺もと小原は放っておいても落ちそうな、火を吹くB29

から目を離し、目標選択を続行する。すると、他の機もいつの間にか攻撃をしていたらしく、黒煙を噴くB29がちらほら。

「ありゃ、出遅れたか」

つい声に出してしまう。後ろを見ると柳瀬がはやくしるでも言うように足元のB29を指している。

「あの左端のをやるぞ」

小原はがつつく柳瀬に目標を指示した。B29編隊左端で、黒煙を噴いているB29だ。とどめを刺してやろうと言うのだ。手を振って了解を示してくる柳瀬。目標よし。こころの準備も機体も万端あとはやるだけだ。

行くぞ。

小原はぐつと操縦桿を倒し、降下に入った。柳瀬も後ろからやや離れてついてくる。小原らを認めたB29編隊は遮二無二応戦の弾幕を撃ちだしてくる。まるで弾丸の雨だ。12.7mmの機銃弾が、小原と柳瀬の周りに集まってくる。

「くそつ、そうそう当たってたまるかつ」

弾丸の中を小原はひた走る。照準機の曇りガラスに映し出された照準環にB29を収め、小原は降下を続ける。先程の大林と同じくB29の正面上方から攻撃し、一気に後方へ降下し抜けるといふ戦法を小原はとる。この攻撃の利点は攻撃する面積が大きくなることと、高速ですれ違うことにより敵からの銃撃を受ける時間を短縮できるという点だ。ただし、高速ですれ違うので衝突しない為にもかなりの技量と度胸を要する。それに射撃の腕もよくないといけない。敵の位置と自分の位置を見越した射撃をしないと、命中弾なしという結果になってしまう。しかし小原は過去にもこの方法を何度もやってきた。だから自信はあったし、自身の技量についても悪くない方だという自負があった。

もしそうでなくても根性で至近距離に迫って弾をぶち込む。そうすれば祈らなくても命中だ。

小原はそう考えながら、敵機を目指す。B29が迫る。まだまだ、

もつと寄せる。さらに近寄る。照準機いっぱいB29。照準環から両翼がはみ出している。それでも撃たない。もつとだ。もつと。小原は本気で至近離に近寄る気だった。今までもそうやって危険なくらい近寄って撃ち込んできた。今度もだ。

ががんと機体が揺れた。やられた、と思うもすぐになんこのれしきと思いなおす。被弾しようとしまいと関係ない。小原は矢のごとくB29に向かうのだ。風防いっぱいB29が迫るの搭乗員の顔が見えた。搭乗員達は白い顔をさらに白くして、迫り来る小原を見ていた。偶然、操縦士と目が合った。小原とかち合った、その操縦士の青い目は言っていた。「こいつ、死を恐れないのか?」と。それほどまでに小原はB29に近接したのだ。ここだつ。

小原は操縦桿に取り付けられた引き金をここぞとばかりに引いた。機首に装備されたホ五・20mm機関砲と、主翼両側に備えられているホ一〇三12・7mm機関銃が火を噴く。そして、命中したかも確認することなく、小原はB29の後方を下に、高速で抜けていった。B29の尾部機銃が撃ってくるもすぐに射程外に離脱した。余裕ができ、水平飛行に戻した小原は機体を見る。左翼に数発の弾痕が見受けられた。さっきのゆれの原因だ。だが、致命傷ではない。飛行に仕様はなかった。

そつだ、柳瀬は?

小原は背後を振り返った。すると、果たせるかな背後には柳瀬機がいた。ちゃんとついてきていたのだ。まずはほつとする小原。手を振ると柳瀬も振り替えてくる。どうやら怪我もないようだ。やれやれ。

続いて遙か上空のB29の編隊を見やった。小原が先程攻撃したB29は黒煙を吐き、徐々に高度を落としていた。やったかな、と小原は思った。と、見る間にB29の降下速度が一段と上がった。そして、まっさかさまに下に落ちていった。下は丘陵地帯だ。落ちても被害はない。一機撃墜である。柳瀬も見ていたようで、小原の

となりに来て、やったなと拳を握っている。小原も頷く。

だが、一機や二機落としても、B29はまだまだ残っていて、今も東京を目指している。

弾丸も燃料もまだある。それにここは日本上空。外地じゃないから落下傘降下しても安心だ。もう一撃かけるか。

小原は指を上には指し、もう一撃しかける旨を柳瀬に伝える。一旦上を見た柳瀬は了解と手を挙げた。小原は柳瀬と共にもう一撃すべく高度を上げ始めた。今の攻撃で一気に千メートルほど下がった。B29の高度に上がるのには数分かかる。それよりもさらに上になると言うのだから、さらに時間がかかる。小原はまごつく愛機を「頑張れ」と激励し、高度を上げる。

「くそ、東京か」

気がつけばもう丘陵地帯を抜けて東京上空へ到達していた。眼下に広がる工場や家々。B29の目標とする、帝都である。

「ちくしょう！」

小原の心は俄かに焦りだした。だが、いくら焦ったところで無駄なことだ。B29は目標に到達してしまったのだ。そして、小原の焦りとは裏腹に、実に悠々とした様子で、B29は爆撃を開始した。投下された爆弾は、市街地に命中、爆煙が上がった。その様子を一部始終、小原は手に取るように見ることができた。

やりやがった！

小原はB29編隊を睨んだ。なんとしても落としてやる。小原は敵愾心に燃えた。それは柳瀬も同じだったらしく、振り返ってみると彼もB29をぐつと睨んでいた。

「やろう、柳瀬。奴らをただで帰しちゃならん」

小原の声が届くわけがない。だが、柳瀬はしかと頷いた。承知した、と。

高度はすでにB29と同じ。後はもう少し上がり、降下して速度を稼ぎつつB29の後方上空よりもう一撃をかける。そのころには恐らく燃料もなくなるだろう。しかし、もう東京上空だ。調布基地

はすぐそこにある。小原は調布の方向を見た。すると、
ん、あれは？

戦闘機が見えた。三式戦闘機だ。数は三。調布の方から飛んできた。まっすぐB29の下方に向かう。

なにをする気だ、あいつら。

小原はその三機をじっと見つめた。

まっすぐ飛んでいた三機はB29の下に位置するや機首を上げ、急上昇を始めた。そのまま攻撃する気らしい。三機はそれぞれに定めた目標に向かって上昇していく。小原はその内の、目に入った一機じっと見つめていた。B29に迫る三式戦闘機。攻撃にしても近寄りすぎる、このままじゃ危ない、と小原は思った。そう思った次の瞬間である。三式戦闘機がB29の尾部に食らいついたのは。聞こえないはずの、ぐしゃっという金属と金属のぶつかり合う音が小原に聞こえた気がした。体当たりした三式戦闘機はB29の水平尾翼と垂直尾翼の一部を千切りとると、まるでそれで力尽きたかのように、機首をがくりと下げ、真つ逆さまに墜落していった。一方体当たりを受けたB29も無事ではない。水平尾翼を千切りとられ安定を失っていた。最初は頑張っていたが、いつしか完全に制御を失い、徐々に機首を下げ始め終いには錐揉みしながら帝都へと落ちていった。落ちていく機はその二機だけではない。他にも一機のB29が、そして二機の三式戦闘機が墜落していくのが見えた。

「体当たりか……」

そう、三機はまさに体当たり攻撃を行った。

震天制空隊。撃墜困難なB29を落とす為、陸軍各飛行戦隊で編成された体当たり攻撃隊。武装、防弾装備、無線機を外して極力軽量に努め、B29に必殺の体当たり攻撃を敢行する空の特別攻撃隊である。その震天制空隊の三機が、今、小原の目の前でB29を撃墜したのだ。

落下傘は？

小原は周りを見やる。だが、それらしきものは遂に発見できな

った。操縦者は恐らく機と運命を共にしたのだろう。小原は体当たりした空中勤務者三名に黙祷を捧げる。そして、目を開き、目の前の敵機に集中する。高度は十分。燃料も残り少なくなってきた。第二撃にしておそらく本日最後の攻撃。小原は後方の柳瀬に合図を送り、降下に入った。

ジャップが懲りずにまたやってきやがった！

そう思ったかどうかは分からないが、敵編隊は迎撃を開始した。本日二度目の弾丸の雨。さすがに二度目だと落ち着いて照準することができた。もっとも、危ういことに変わりはなく、すぐ脇を飛んでいく曳光弾を見ると肝が冷えた。しかし、突進をやめることはない。まっすぐに敵機に向かう。小原が狙うは最後尾のB29。弾丸をすり抜け一直線だ。

隊列の最後尾が一番危険と言うわけだ。それをこの野郎にはいやと言うほど味わってもらおう。

小原と柳瀬はまっすぐにB29に向かう。向こうも必死だ。やられる前にやると言うばかりに撃ちまくっている。こちらも負けじとさらに突っ込んでいく。そして、体当たりをしかねない近距離まで近接した。小原は機関砲と機銃を発射。そして、そのまま追撃の銃撃をかわしつつ、B29の下方に離脱していった。降下しつつ振り返ってみると、大した損害与えられなかったらしく、最後尾のB29は何食わぬ顔で飛んでいる。

「ちっ」

大きなこと言って突っ込んでいった割りに戦果はこれだけか。

小原は舌打ちし、落胆した。それは、いつの間にか隣にいた柳瀬も同じようだ。悔しそうにB29を見ている。だが、そうは言ってももう一撃は加えられそうにない。燃料もないし、弾丸も今の底をついた。本日の戦果、撃墜確実が一、撃破一。

「帰還しよう」

柳瀬に合図を送り、小原は機首を返し、調布に向けて進路を取った。柳瀬も続く。今回の邀撃戦はこうして幕を閉じた。

地上に帰還した小原と柳瀬は先に帰還していた大林に報告を終え、待機所の椅子に腰を下ろした。

「くそ、B公め。悠々と飛んでいきやがって」

口に啜えた煙草にマツチで火をつけ一服しつつ、小原は言った。

「こっちの戦果は邀撃に出た部隊全部あわせて六機。対して攻撃に来たB29は、えーと、八十機」

柳瀬は言い終えて腕を組んで天を仰いだ。

「今日は敵が分散してきたからな。こっちもまとまらず、戦果は少なかつたな」

さきの邀撃に参加した清水孝四郎中尉が言った。

「撃墜数のうち二機は震天隊ですしね。うちの部隊の……」

小原は先程の戦いで見た、三式戦闘機の体当たりの場面を思い出す。

先程報告のとき大林から聞いた話では、操縦者三名はやはり落下降下できなかつたらしい。機体と共に遺体が収容されたと言う。名前は多田曹長、日吉伍長、羽間伍長。名を聞き、小原は愕然とした。何故なら同じ戦隊の同僚達であったからだ。調布の方から飛んできたからまさかとは思っていたのだが。

「小原、見てたのか？」

清水が身を乗り出してきた。

「ええ。柳瀬と二人で」

話を向けられた柳瀬は、清水を見て頷いた。

「B29の尾翼に噛り付くのを見ました」

「そうか。尾翼にか。そうか……」

清水は言い終えると、目を閉じた。散った三人に思いをはせているのだろう。三人は清水の指揮する飛行隊（中隊のこと。陸軍飛行戦隊は通常三個飛行隊よりなる。昭和18年より編成が改められ、

中隊は飛行隊という呼称になった)の所属で、いわば直属の部下だった。震天隊に志願したのはつい先日のこと。いつか散ることになるだろうとは分かっていたが、あまりにも早いことで、清水も心の整理がついていないのかもしれない。それは小原にも同じことではあった。つい先程まで一緒に飯を食っていたのだ。それが、邀撃であえなくなつた数分後にまさか分かれることになるとは。あまりにも早すぎる別れに、小原も少なからず動揺していた。

「いかな、感傷的になつた」

清水は目をあけると照れくさそうに笑つた。

「今は戦争。お互いいつか死ぬ身なんだ。それにあいつらは震天隊。こうなることは分かっていたんだ。がっかりするのはよそうや」

小原と柳瀬の方を叩いて、清水は言った。

「はい」

小原らはうんと頷くより他なかつた。

自分達以上に辛いであろう清水がこうやって笑っているのだ。自分も気を取り直さなくては、と小原は思った。

「さて、俺はこれで失礼するよ」

そういつと清水は小原らに背を向け、待機所を出て行つた。残された二人は互いに顔を見合わせた。

「強い人だなあ」

「ああ」

清水の出で行つた扉を見ながら、二人は言い合つた。

B29が墜落しているらしい。その話を聞いた小原と柳瀬は一つ見に行つてみようと共に自転車に跨り、見物に行つた。

「酷いもんだな」

小原は街の光景にそんな感想を漏らした。

自転車を漕ぎながら市街を走ると、目に入るのは爆撃の跡。焼け、倒壊した家々に、荷物を持って何処かへと避難する人々。

「ああ、酷いな」

柳瀬もそれを横目に見ながら言った。

二人はは、自分達の力のなさを突きつけられた。頑張っても頑張っても、落とせるB29の少なさ。それに対し、相手はぽんぽん爆弾を落としていく。歯がゆかった。悔しかった。そして、どうすることもできずにいる自分が情けなかった。

「ここだ」

そうこうするうちに件の墜落現場に到着した。現場には既に警察や陸海軍を始めとする航空技術関係者が調査に来ていた。

「あれがそうだな」

柳瀬が指を指した。指す方向をみると、ばかでかい翼が見受けられた。するすると視線を下げていくと、そこにはB29の機体が見られた。二人は自転車をたてると、B29に近寄っていった。

「これがB29か。でかいな」

間近でみるB29は大迫力であった。こんな大きな機を相手にしていたのか。これと比するに我が三式戦闘機のなんと小さきことよ、と小原は眩暈を感じてしまった。

「こんなのを何十機、いや何百機もつくるなんて。アメさんはとんでもないな」

小原は柳瀬にこっそりと耳打ちした。近くには我が日本の航空関係者がいる。自分の国を悪く言っているように聞かれては不味いと思っただのだ。

「だな」

柳瀬は腰に手を当てて答えた。

「おっと」

柳瀬がさつとB29墜落現場に背を向けた。訳が分からないが、とりあえず小原も同じく背を向ける。

「おい、なんで背を向ける？」

肘で柳瀬の脇をつついて訊ねる。

「如何にも階級が高そうな人に睨まれた」

柳瀬は小声で答えた。

「それはまずいな。ずらかろう」

ぎくりとし、小原は言った。二人は足早にその場を去ろうとした。
「おい、その二人」

しまった。

心の中で悪態をつく小原。

逃げようとしたが遅かった。声をかけられては振り向かないわけにはいかない。来るんじゃないかと後悔しつつ二人は振り返った。見ると将校が一人、こちらに向かって歩いてくる。

「お前達は防空戦闘機隊の所属か？」

二人の前に立ち、将校が言った。階級章から大佐だと分かった。自分達よりもかなり上の階級だ。二人は姿勢を正し、直立不動になつて答える。

「はい、そうですあります」

声を張り上げ、小原が言った。

「名前は」

「小原将彦軍曹であります」

「柳瀬徹軍曹です」

視線を上になげながら、二人は答えた。

「ふむ。諸君は今日の邀撃に参加したのかね？」

「え、あ、はい」

小原はなんでそんなことを、と思いつつも答えた。

「そうか。撃墜した敵機を見に来たんだな。その気持ちは分かる。だが、二人は空中勤務者であろう？ いつまた敵機が来るとも限らんのにこんなところに来ていては駄目ではないか」

「はい、申し訳ありません！」

二人は声をそろえて言った。

「気持ちは分かるといったらう。以後は気をつけるように。それと、本日の邀撃ご苦労であった」

将校はそういうと踵を返し、二人の前から去っていった。てつき

り大目玉かと思っていたがやんわりと注意されただけ。それどころか労いの言葉まで。二人は顔を見合わせた。

「ま、まあとにかく帰ろうぜ」

小原は気を取り直して、柳瀬に言った。

「ああ、そうしよう」

柳瀬は頷き、二人はたてておいた自転車を押して、墜落現場を後にした。

「なんですぐ開放してくれたんだろう？」

墜落現場を後にしてからしばらく。小原とらんで自転車を引いていた柳瀬は首をかしげて言った。

「研究の標本を提供したから、か？」

勿論違うと思っている。第一、あれは小原が撃墜したB29ではない。たぶん、あの三人のなかの誰かのだ。

「本当にそう思うか、小原」

「分かんないって。人の心の動きなんか」

結局他人の心のことなど分かりはしないのだ。

「それもそうだな」

分かつたら苦労しない。それが分からないから人は努力するのだ、と小原はもつともらしいことを言ってみた。

「哲学者だな」

柳瀬は笑いながら言った。

「貴様、馬鹿にしてるな？」

「いや、別に」

「ならにやにや笑うな」

お互いに小突き合いながら歩く。

「あ」

突然、何を見つけたのか柳瀬が自転車を放り出して走り出した。

「あ、柳瀬」

小原は自転車を置き、柳瀬の後を追った。だが、走るまでもなかった。柳瀬はすぐに立ち止まった。そして、地面に片膝をついた。

「どうしたんだ」

傍らに立ち、小原は柳瀬肩を叩いた。

「小原、これ……」

「これは……」

柳瀬が見ていたもの。それは真っ黒に焼けた遺体だった。焼けた遺体は女性らしい。男にしては小柄であったからだ。それから、子供らしき遺体を抱いていたのだ。

「爆撃でやられたんだな……。柳瀬、見る」

「うん、分かってる」

遺体はそれだけではなかった。道端にも、逃げ遅れ、爆弾にやられた人々の遺体が転々としていた。小原らからやや離れたところでは壮年の男性が女性を引きずって入るのが見受けられた。男性が運ぶ遺体は目立った外傷は見受けられないが、その顔色は青く、生気がない。恐らく男性の奥方なのだろう。彼女もまた、爆撃の犠牲になったのだ。

小原らが通りかかったこの辺りは一番被害の大きかったところであった。家々は焼け落ち、見るも無残な光景になってしまっている。それよりも心を抉るものは、家を失い、家族を失って呆然とする人達の姿である。

「柳瀬、行こう」

「うん」

二人はいたたまれなくなり、親子の遺体に手を合わせると、置いておいた自転車を引いて、基地に戻る道を歩き始めた。

二人はじつと俯きながら歩いた。すれ違う人々に申し訳なく思え、顔を上げられなかったのだ。二人は被害の出た一帯から出るまでのしばらくの間、じつと下を向いて歩いた。

「小原」

途中、柳瀬が言った。

「何だ」

「俺は、ひどく申し訳がないよ」

「そうだな。俺もだよ」

「小原、俺は、俺はなんとしてもあいつらを……」

柳瀬はぐつと空を仰いだ。小原も空を仰ぎ見た。そろそろ日が落ちようとしていた。夕焼けの空には昼とは違い、雲が出てきていた。柳瀬はそれ以上は言わず、ぐつと唇をかみ締め、じつと空を見つめながら歩いた。柳瀬の心が良く分かるだけに、小原も何も言わず、黙って歩いたのだった。

基地に戻った二人は自転車を返すと、そのまま愛機の眠る掩蔽壕に向かった。空襲を避ける為、戦隊の各戦闘機はこのように横穴に隠したり、偽装を施して林の中に隠したりしていた。

二人は途中でわかれ、各々の機に歩み寄っていった。

「やあ、ご苦労さん」

小原は愛機の上で整備を行っている整備員らに声をかけた。

「軍曹殿、被弾箇所は塞いでおきましたよ」

整備士の一人、前原上等兵が整備の手を休め、主翼から地面に降り立って言った。小原は先程の邀撃戦でB29に空けられた穴の開いていた箇所を見る。前原の言うとおり、穴はジュラルミンのパッチで塞いでくれていた。

「ありがとう。穴あけたままじゃどうも格好がつかないからね」

塞がれた箇所を小原は撫でる。近くで見るとあれだが、遠目には穴が開いていたなんてことは気がつかないだろう。それにしても、愛機がこうして穴隠しをするのもこれで二十箇所目くらいになる。小原は邀撃戦で毎回穴を開けて帰ってくるのだ。穴を開けるだけならまだいい。一度は操縦索を切られかけ、危うく操縦不能になりそうになったこともあったし、風防を破壊され、総取替えしたこともあった。

「お前達には感謝してるよ。お陰でいつも快適に飛べるよ」

小原は前原に言った。すると前原ははにかんだように頭を掻いた。「いえ、これが仕事ですから。それに、自分達はいつも地上の安全なところにいるんです。軍曹殿や空中勤務者の人々こそ大変でしょう」

「そうかな。俺は別に大変とは思わんのだが。確かに弾丸の中を飛ぶのは、正直言って肝が冷えるよ。でも俺はそっちの方がやりやすいと思えるのだ。君らは飛行中、事故がないよう慎重に、神経を張って整備に当たっている。俺にはその方が難しいよ」

戦隊の整備員達は苦勞のし通しなのである。三式戦闘機は日本軍では珍しい水冷発動機である八四〇を搭載した機だ。空冷の整備とは勝手が違い、他の戦隊の整備員達は難物扱いしていた。ただ、小原の所属戦隊の整備員達は八四〇の整備に関する講習を受けており、水冷発動機に関しても特別難しいとは思わなくなっていた。そのため高い稼働率を維持していた。しかし、畑の違う小原にとってはそういう話を聞いてもやはりまいちぴんとこなかった。

「はは、それでは軍曹殿に代わり、命一杯気合を入れて整備をしますよ。私達にとってもこいつは愛機ですからね」

前原は機体を手のひらでぼんぼんと叩いていった

「うん。一つ、よろしく頼むよ。あ、そうだ」

小原は先程から整備員らに言おうと思っていたことがあった。

「両翼の12・7mmを外してくれんか」

「え、外すのですか」

小原の申し出に驚いたような顔をする前原。当然だろう。なにせ戦闘機にとって重要な要素であるの武装を一部とはいえ撤去するのだ。

「どうせB29に12・7mmは通用しないよ。なら外して20mだけで戦った方がいいだろう。弾の節約にもなるしね。それから、背中の防弾板等一部の防衛装備も一緒に頼みたい。少しでも機体を軽くしたいんだ」

「……軍曹殿、まさか」

前原がじつと見つめてきた。小原は前原がなにを言わんとしているか察し、笑いだした。

「前原、俺は体当たりするんじゃないよ。さっきも言ったけど少しでも機体を軽くしたいんだ。一撃でも多く、攻撃をかけたいからね」
「そうですね、よかったです。今日の体当たりを見た軍曹殿が、次は自分もとやる気になったのではないかと不安になってしまいました」

前原はほつと安堵の表情を浮かべる。

「今のところ体当たりは未定だね。だが、いつかやるかもしれないよ。なにせうちの戦隊は“全員体当たり”がモットーだからね」

「冗談めかして言うと前原は「それは勘弁してください、私らの仕事がなくならない」と冗談で返してきた。

「ですが、軍曹殿。武装はともかくとして、防弾装備まで外しますのは危険ではないかと思うのですが……」

「それは百も承知。だが、どうせB公の弾幕の中に突っ込むんだ。そう大きくは変わらないよ」

小原はB29の弾丸の雨を思い出す。過去、この雨の中に突っ込んでいて、無傷であった者はそう多くはない。必ず何かしらの傷は受けてきたし、人によっては撃墜されてしまう者もある。何れにする、危険に飛び込むことに変わりはないのだ。

「とにかく一撃だ。一撃でも多くB公に食らわせられればいいんだ。少しでも、被害を出さないようにする為にも……」

小原の脳裏に浮かぶは先程見てきた街の様子。親子の遺体、そして、妻を引きずる壮年男性。あんなことが眼下で起こっているのだ。危険もひつたくれもなかった。これ以上あんなことが起こらない様にするためにも……。

「分かりました。言われたものは外しておきます」

小原の気持ちは通じたのか、それは分からない。だが、前原は小原の表情から何かを察したのかもしれない。とにかく、前原は了承してくれた。

「ああ」

小原は前原の肩を叩いた。心配する前原に俺は大丈夫だと言い聞かせるように。そして、小原は「じゃあ、すまんがよろしく」と前原らに言い、踵を返して掩蔽壕を後にした。

掩蔽壕を出るとちょうど柳瀬もでてきたところだったらしく、鉢合わせした。

「よお。俺は装備を一部外してもらってるよ。少しでも機体を軽くするんだ」

小原はさっそく先程のことを柳瀬に言った。すると。

「何だ、同じこと考えてたのか」

と、柳瀬が答えたのだった。

「何い、貴様もか」

「俺達だけじゃないよ。他もやっているらしい」

「これはいよいよ“全員体当たり”だな」

「そうだね。だが、それくらいでないとB29は落ちんよ。いや、この程度のことでも……」

五分刻りの頭を撫でながら、日が落ち、暗くなり始めた夜空を見上げる柳瀬。

「もつと高高度性能のいい機があればな……」

「それは言っな、柳瀬。開発はしているはずだよ。だが、このままじゃ間に合わないかもな。だからさ、今ある機を最大限に活かすしかない」

「そうだね……。明日は来るかな」

小原も柳瀬同様に空を見上げ、敵がいつも来る方向、西を見やつた。

「……俺は敵じゃないからなあ。だが、来るだろうな。明日も晴れそうだ」

雲は少なく、一番星をはじめとする星達が、透き通った空に浮かんでいるのが容易に見て取れた。

「なら、俺は……」

「柳瀬……」

小原は言葉を区切った柳瀬を見た。薄暗い空の下で、柳瀬は何か決意に満ちた表情を浮かべているように小原には思えた。まさか、と小原は思った。

「さあ、小原、飯だ飯。俺は腹が減った」

不意に地上に顔を戻し、柳瀬は小原に笑顔を向けた。

見当違いだったか。

柳瀬の表情は、いつもの朗らかで温厚な、柳瀬の顔そのものであった。

「そうだな。よし、行くか」

柳瀬と肩を並べ、小原は夕食を食べに、宿舎に戻る道を歩き始めた。

あくる日。今日のB29の来週を予想し、小原と柳瀬ら戦隊の邀撃担当者は朝から待機所で待機していた。だが、なかなか敵はやってこない。暇をもてあました空中勤務者達は各々に暇つぶしをしていた。小原は同僚の神健児伍長を相手に碁を打ち、柳瀬は他の同僚らと談笑した。そして、まもなく昼になろうとしていたところ。

『情報。敵B29編隊、小笠原諸島を北上中。待機中の空中勤務者は……』

ブザーが鳴り、スピーカーから情報が流れてきた。小笠原を守備する部隊、“小笠原兵団”からの防空情報だ。すわ敵襲と待機所に詰めていた空中勤務者達は立ち上がり、各々準備を始める。

小原はそれまで履いていたサンダルを脱ぎ、靴下を履いて飛行靴に手を伸ばした。

柳瀬は飛行帽を引っつかむと、同僚の奥澤直志伍長を押しやりながら、外に向かった。

外ではすでに戦隊長の大林少佐が今日邀撃に上がる者達を待っていた。その大林の視線の先では、掩蔽や林から引き出された三式戦闘機唸りを上げ始めていた。

小原ら隊員は待機所を出、大林の前に整列した。今日のは総勢に二十六名での出動だ。飛行服を着、飛行帽を被り準備万端整った隊員らが、大林に注目する。

「部隊長殿、全員そろいました！」

大林を除けば今日の邀撃で一番階級が高い白石大尉が大林に報告した。それまで愛機を見つめていた若き戦隊長大林はくるりと向き直ると皆の顔を見渡した。

「今日は絶好の爆撃日和になるだろう、と思っただけでいつくるかいつくるかとじっとこさ待っていたが敵さん全然来やしない。で、痺れを切らしてもう今日は来ないかな、って思ったところでようやくの来

襲だ。はは、こりゃ新車の焦らし戦法だよきつと。全く、敵さんにはご苦労様と言ってやりたいものだね」

開口一番に冗談を言う。これを聞いた隊員達は一瞬ぼかんとしたが、次の瞬間には冗談だと気がつくとそれぞれに笑みを浮かべ、声を出して笑うも者や「ごくろうさん」と空に向かって叫ぶ者、「部隊長殿は肝がすわつとるのお」と隣に話しかけ感心したりする者とひょうきんな表情を見せ始めた。大林はなにも意味もなくこんな冗談を言ったわけではない。これから激闘が始まるうと言うのに集まった隊員らと来たら固まった表情をしているので、よしここはひとつリラックスさせてやろう、と思ったのだ。彼なりの気遣いの方である。大林は齡二十四の若者であった。だが、不屈の闘志とこのような隊員らへの気遣いにより、部隊の信任を得ていた。

「冗談でほどよく緊張が解けたところで大林は隊員らに訓示を始めるべく姿勢を正した。隊員らもそれに倣い、さつと姿勢を正して口を閉じ、大林の話しに耳を向ける。

「B29は現在、帝都に接近中である。戦隊は稼動全機をもって全力出動、敵を邀撃する。昨日のように簡単に爆撃を許すわけにはいかない。各員全力で戦ってくれ。以上だ」

「敬礼！」

隊員達は白石の声で一斉に挙手敬礼。大林は返礼し、手を下げると隊員達も手を下げた。そして、隊員達は各々の愛機に向かって走り出した。

「小原」

小原も愛機に向かおうとしたとき、柳瀬が声をかけてきた。

「おう、どうした」

小原は近寄ってきた柳瀬を見やった。

「今日は俺達ペアじゃないが、しっかりやろうぜ」

柳瀬は力強い口調で言った。昨日は小原は柳瀬を僚機としていたが、本来は別々なのだ。小原の本当の僚機、神伍長は昨日は機が不調で出動できなかったのと同じく僚機が不調だった柳瀬とペアを組

んだのだ。

さて、そんなことを言ってきた柳瀬に対し、小原は、

「当然だ。貴様、俺がいないからってびくびくしてるのか」

と憎まれ口を叩いた。

「そんなわけあるか。貴様こそ、俺が背中を守らんでも大丈夫なのか」

すると柳瀬も憎まれ口で返してきた。しばらくにらみ合い。だが、すぐにお互い破顔一笑し肩を叩きあった。別に本気で喧嘩しようというわけではない。ちよつとした親友同士の交流だ。

「その様子なら大丈夫そうだな、小原よ」

柳瀬がにこやかな笑みを浮かべながら言う。

「応とも、絶好調だ。五、六機くらいはB29を落としてやるよ」

「無理しなさんな。でも、そうだな出動する奴一人につき二機を落とせば全部落とせるんでないかな」

「分からんぞお。敵はアメさんだ。工業力三十倍のお国だよ」

「なら一人三十機か。それこそ無理だよ」

「無理か」

笑いあいながら頭を掻く二人。

「軍曹殿！ 準備できています、お早く！」

呼ばれて見て見ると愛機の爆音に負けなくらいの大声で前原が叫んでいた。神伍長も隣でなにか叫びながら手招きをしている。

「いかん。急ごう、柳瀬」

「ああ、また空でな」

「うん」

二人はさつと分かれて愛機に向かって走っていった。

「いや、濟まんな二人とも」

前原と神に向けて手刀を切りつつ、小原は愛機に寄って行った。

「軍曹殿、今日はしっかりとついていきますよ！」

神が耳元で叫ぶ。三式戦闘機の発動機音のせいで、こうしないとよく聞こえないのだ。

「よしよし！ それじゃあ上がるぞ！」

「はい！」

神を機に向かわせ、小原も愛機の主翼に飛び乗り、操縦席に向かった。風防はすでに開いている。操縦席に体を潜り込ませる。前原が寄ってきて、バンドを締めるのを手伝ってくれる。バンドを締め終わり、異常がないことを確認し、小原は前原に向かって頷いた。

「昨日言われたと通り、軽量化してあります。頑張ってください！」
「任せてくれ！」

小原は前原に頷いて見せた。前原は敬礼をして、機から離れていた。

「車輪止め外せ！」

両腕を左右に開き、主翼の下で待機していた整備員に車輪止めを外すよう指示する。それを見た整備員は車輪止めを外し、機から離れていった。

小原は再三周囲の安全を確認し、手刀を進行方向へ向けて振りかざした。スロットルをやや引き、回転数を上げる。ゆっくりと機が動き出す。後ろから神の三式戦闘機が同様にゆっくりとついてくる。誘導路を走りながらすぐ横の滑走路を見ると、既に離陸を開始している三式戦闘機が見えた。次々と離陸していく戦隊の仲間達。その中に、柳瀬の機も見えた。先に行ったようだ。

小原と神も滑走路まで進出した。滑走路まで出ると、小原神の方を見て“行くぞ”と合図を送る。頷き返してくる神伍長。小原はまっすぐ伸びる滑走路に乗り、スロットルを全開にした。俄かに速度が上がる。がたがたと機体が振動する。そして、速度計がある速度を指したところでふと振動がなくなった。機が地上を離れ、浮き上がったのだ。小原は操縦桿をゆっくり引いて機首を上げ、大空目指して飛び上がった。脚をしまっ為、レバーを引く。ランプが変わり、脚が上げたことを教えてくれる。小原は前方に見える柳瀬らの編隊を追って、高度を上げていった。そして、高度五千くらい先が上がっていた戦隊機が集合しているのが見えた。小原は神を伴って隊列

の後ろについた。ここで一旦部隊を集結させ、地上からの情報を待つのだ。

とりあえずは一息つける。小原は後ろを見る。左やや後方に神の三式戦闘機。そして、更に後方から四機の三式戦闘機が追い迫ってきていた。その四機で全機集合らしい。間もなくその四機も合流した。各機は隊列を組み終えるのと前後して、地上から情報が入った。『こちらながと。かもくじら五十、みやこ……』

五十！ 昨日より多いや。

小原の眉間にしわが寄る。こちらは昨日よりも数多く出撃している。数にすれば倍以上だ。だが、敵も昨日より多めにB29出してこようとは。これは困難な戦いになる。小原は冷としたものを感じた。

ふと、横に三式戦闘機が一機寄ってきた。見ると柳瀬の機だった。『びくついてるな』とでも言うようににやけ面を小原に向けてくる。『このくらい屁でもない』と小原は拳を上げて軽く振り回す。それを見た柳瀬はうんうん頷き、小原の右側やや後方についた。柳瀬の右後方には柳瀬の僚機、安藤直衛伍長。左にいる神とあわせこれで四機編隊、つまり一個小隊となった。小原らは第一飛行隊第三小隊で、小原は小隊長である。柳瀬は右後方の位置から『小隊長、頼みますよ』と手を振っていた。小原は適当に手を振って答え、次いで神伍長の方を見た。緊張しているのか、こちらが見ていることに気がついていない。盛んに手を振っても気がつかない。なので、機をちよつとだけ左右に振ってみた。するとようやく気がついたのか、真っ青な顔で、神はこっちを見た。

『そんなことでどうする、気合を入れる！』

握りこぶしを握って見せる。すると、神伍長は『わかりました』と頷き、深呼吸をした。それで幾分か落ち着いたらしい。顔色はさつきよりはましになっていた。

と、そうこうしていると更なる情報が入った。すれによるとB29は高度九千で東京に向かっていているという。部隊は直ちに高度一万

まで上昇し始める。小原は酸素マスクを装着し、酸素欠乏に備える。高度六千を越えたところで三式戦闘機の上昇速度は徐々に低下し始める。軽量化しているとはいえ一万まで上がるのに数十分を要した。前回よりも高度が高い為、より不安定な感じがした。機首を上げるようにしていないと落っこちそうだ。

ちよつとでも気を許したら途端に真つ逆さま。そんな言葉が脳裏によぎった。

『敵機認む！』

慎重に機を操っていると、無線電話の受信機に敵機を見つけたらしい隊員の声が飛び込んできた。こつちが高度一万に上がる間にB29編隊は肉眼で確認できるくらいまで近付いていたのだ。

どこだ。

小原は周囲を索敵する。すると、日の光を反射しながら東進するB29の編隊が小さくではあるが見受けられた。

大林機が前に出、部隊を率いてB29編隊に向かう。

接近すれば、いるわいるわB29が五十機以上。悠然と、東京に向けて飛んでいた。

『かぜ1、これより攻撃』

大林の声が電波に乗り、受信機から聞こえてきた。全機が突撃体制をとる。

小原は柳瀬に分かれるよう手信号で命じた。柳瀬は手を上げて了解の旨を報告し、小原らから離れていった。小原は神を伴い、昨日と同じく攻撃する敵機を選定する。今回は昨日よりも更に高度が高い。恐らく第二撃はほぼ不可能だろう。各機一撃で致命傷を与えるべく慎重になっている。そんな中、真つ先駆けて突っ込んでいくのはやはり大林であった。満々たる闘志を持った戦隊長機は「続け！」と叫んで敵陣に突っ込んでいく騎兵のようであった。僚機も後れじとついて行く。これに応じ、二番槍をあげるは白石大尉。彼も目星をつけた敵機に向かって僚機と共に突撃していった。戦隊長らを戦闘に、計八機の三式戦闘機がまるで放たれたの矢のごとくB29に

向かっていく。B29の弾丸を避け、大林はB29編隊の先頭機を狙う。十分に近寄り、20mm機関砲を撃ち込む。そして、下方へと離脱していく。やや遅れて大林の僚機も攻撃し、離脱。先頭のB29は大林機らの攻撃で損傷を受けたらしく一瞬ぐらつとゆれた。だが、以後特別な変化はなかった。やはり優れた防弾性能である。他の機もさしたる戦果は挙げられなかった。一機がエンジンから煙を吐いただけに留まった。

超空の要塞の名は伊達じゃない、か。

B29“スーパーフォートレス”。その二つ名に恥じない堅牢ぶりである。

続いて六機の三式戦闘機が攻撃位置につき、突撃を慣行した。先程の攻撃で煙を吐B29に対し、攻撃する。この攻撃で、このB29はかなりの損害を受けたらしく、エンジンから出火、間もなく操縦不能となり地上へと落下していった。これを見た隊員達は、次は俺がと敵機にかかっていく。小原も敵機に目星をつけた。狙うは編隊最後尾のB29。軽量化の為、小原はホ5の弾数も減らしていた。その為、この一撃に全てをかけるしかなかった。

やるぞ。

神伍長の方をちらつと見、小原は突撃を開始した。小原らの接近を知るやB29編隊は銃撃を向けてきた。火線が小原と神の周囲を包む。小原は神伍長が気になったが、残念ながら今は目の前のことに集中しなければならぬ。少しでも集中を削ぐと、B29への攻撃が失敗してしまう。

歯を食いしばって弾丸の中を走り抜ける。時間にしてほんの数秒のことだ。だが、それが無限の時間に感じるほどに、この瞬間は恐ろしい。それを精神力で押さえ、B29必墜の信念を推進力としてひた走る。

間もなくB29が照準機いっぱいになった。狙うはB29の胴体部。この辺りが一番狙いやすく、ここに照準すればどこかに当たる。小原は過去の経験からそのように答えを導き出していた。ここだと

思えるところで引き金を引く。機首のホ五二門が火を噴く。引き金を引きつつ、操縦桿を操りB29の右主翼の後ろをぎりぎりで抜けていく。B29の胴体が見えたときは「ぶつかる！」と目を閉じてしまった。だが、衝撃はなかった。無事通り抜けたのだ。急いで操縦桿を引き、機を水平にする。高度は一気に七千まで下がっていた。上空を飛ぶB29が小さく見える。

戦果は。

小原は攻撃したはずのB29を見た。やはりと言おうか、小原が攻撃したB29は確かに命中弾を受け損傷はしたが、撃墜には至らなかった。そもそも堅牢なB29をたつた一撃で屠れというのが無理な話なのだ。

と、B29を睨んでいると視界の隅に、飛行機が映った。神伍長だ。小原よりもさらに高度が低かったらしく、いそいそと小原の近くまで上ってきたようだ。

「どうだった」

小原は神機の真横に機をつけ、風防越しに神に問うてみる。もちろん身振り手振りだ。答えは神伍長の苦々しい顔ですぐに分かった。恐らくうまくいかなかったのだろう。神伍長は小原と比べると飛行時間も少なく、またB29に対する戦闘経験も少ない。確かこれで二度目だったはずだ。申し訳なさそうにする神に対し小原は「がっかりするな」と元気付けるようにした。そして、再び上を行くB29を見やる。柳瀬らがどうなったのか気になった。できるだけ近づけるため、機を上昇させる。そして、じつと目を凝らすと、まだ攻撃していない三式戦闘機が四機ほど、ふらふらとB29を追って飛んでいる。性能差で徐々に離され始めているのだ。そのうちの二機に目を凝らす。柳瀬の機だ。迷彩を施されていない銀色の三式戦闘機が柳瀬の機だ。その柳瀬機が、僚機の安藤伍長を引き連れ遂に攻撃を開始した。

「頼むぞ、柳瀬」

小原は柳瀬の攻撃成功を祈った。

柳瀬機は編隊右端（小原から見て）のB29を攻撃した。まず柳瀬が攻撃。巧みな射撃で白煙を噴かせ、そのまま下方に抜けていった。

流石だな。

柳瀬の射撃術は確かだ。見事に損害を与えた。続いて、安藤が攻撃する。柳瀬は僚機と間を置かずして攻撃するのではなく、分離して攻撃することによりより確実な戦果を収める手段を取ったようだ。小原は安藤の攻撃を見守る。降りてきた柳瀬も機を水平にして小原らと合流しつつ、安藤を見ている。安藤は小原のようにぎりぎりまで敵機に近寄り、機関砲を撃ち放った。射弾は損傷箇所に見事に命中したようだ。傷が深くなり、B29は黒煙を吐いた。そして、遂に黒煙は炎へと変貌し、機体を焦がし始めた。B29の機体がバランスを崩す。恐らく機内では操縦士が必死に機を立て直そうとしているだろう。他の乗員達は神に祈りを捧げているかもしれない。だが、運命の女神は彼らを助けることはなかった。炎が燃料か、もしくは爆弾に引火したのだろう。轟音を立て、B29が爆発した。ぽつきりと翼を折り、錐揉みしながらB29は墜落していった。

「やった」

安藤の攻撃は成功したのだ。小原は機内で小躍りしそうになった。神も、そして柳瀬も嬉しげな表情を浮かべている。

小原は墜落していくB29をもう一度見た。そして、B29以外に墜落していく機を見つけた。真つ逆さまに地上に落ちていくその機は三式戦闘機。

「安藤！」

小原は叫んだ。そう、安藤だ。彼は攻撃の最中にB29の防御火器の銃撃で被弾したのだろう。そして、機体か自身のからだに重大な損傷を受けたのだ。そうでなければ今頃機を建て直し、こちらに合流しているはずだ。小原は見間違いであることを祈り、視線を上げ、周囲を探した。だが、安藤の機は見当たらなかった。柳瀬を見やった。柳瀬は愛機をやや傾け、落ち行く安藤をじっと見つめてい

た。小原は天を仰いだ。安藤直衛伍長は戦死した。その事実が小原の心を締め付けたのだ。だが、小原以上に苦しいのは柳瀬であろう。柳瀬は安藤機が見えなくなるまでずっとその姿を追っていた。やがて、見えなくなると機を水平になおした。そして、小原に目を向けてきた。

「柳瀬……」

柳瀬の顔は深い悲しみに沈んでいた。弟のように可愛がっていた安藤の死が、彼に重くのしかかっているのだろう。

だが、柳瀬は沈んでいるままではなつた。顔を上げ、柳瀬はB29をきつと睨んだ。そして、ひとしきり睨むと、まるで何か覚悟を決めたような顔を小原に向けてきた。昨日、掩蔽壕前で見せた、あの顔だった。小原ははつとした。

「柳瀬……。おい、柳瀬」

小原は嫌な予感がした。

柳瀬、お前はもしや……。

ふと、柳瀬が微笑んだ。そして、小原に向かって手を振つたのだ。まるで今生の別れのように。

「柳瀬、待て、止せっ！」

聞こえないと分かっているも叫ばずにはいらなかった。それにこの近距離だ。小原の表情から、止めようとしていることは分かるだろう。だが、分かった上で、柳瀬は首を横に振つた。

「安藤の後を追うなんて考えるな！ 柳瀬、止すんだ！」

（小原、すまん。だが、俺はやるよ。そうじゃないと申し訳がたたんだ。安藤にも、あの親子にも）

会話など成立するはずがない。だが、小原には柳瀬の声が聞こえた。そう、確かに聞こえたのだ。

柳瀬はまた手を振ると、それまで額の方まで上げていた飛行眼鏡をかけた。その挙動は、まるで何もかもを拒否するようであった。そして、柳瀬は機を上昇させていった。

「柳瀬……」

呆然とする小原。柳瀬はどんどん上昇していく。弾丸と燃料を使ったお陰で機体が軽くなったのだらう。信じられないような速度で柳瀬は上昇していった。恐らく小原の見間違い、勘違いだらう。だが、小原には柳瀬機は急上昇していったように見えた。小原はじつと柳瀬を見守るしかなかった。徐々にB29編隊に近寄っていく柳瀬。彼は、編隊の後列二番目に位置していたB29に向かっていった。いつの間にか雲が出ていた。そのが柳瀬機とB29編隊を一瞬隠した。そのせいで、小原は柳瀬が敵機に体当たりをする瞬間を見ることがなかった。小原が見たのは、ばらばらになって墜落していく三式戦闘機と、主翼をへし折られたB29だった。雲が柳瀬の接近を隠したのだらう。敵機は反撃を行っていないように見えた。体当たりを受けた機の乗員達も、何が起こったのか分からなかったかもしれない。だが、彼らの心は、もう誰も知ることができない。何故なら、彼らはその命を散らしたのだから。

「柳瀬……大馬鹿野郎っ」

小原は計機板に頭を打ち付けた。とめどなく涙が溢れてきた。

小原と同じく一部始終を見守っていた神が、寄り添うようにして小原の横にやってきた。小原は神を見やった。彼もまた、目に涙を浮かべていた。

「神、お前も泣いてくれるか」

小原は神を見ながら言った。神は小原の言葉にまるで分かったかのように頷いた。苦楽を共にしてきた柳瀬や、弟のように大切に育ててきた神とは心が繋がっていたのだらう。だからこそ無線電話がなくても会話が成立したのだ。だが、そんな深いつながりを持った男の一人にして親友の柳瀬は、大空に散った。安藤の後を追うように。

二人はしばらくの間、追悼するように小原と安藤が散った空を飛んだ。

B29五機撃墜、四機撃破。これが本日の戦隊の戦果であった。そして、戦隊は出撃数二十六機の内、未帰還機五機を数えたのである。

つ
た。

四

それから二日ほど、平穏な日々が続いた。その間小原は補充されてきた若者達に訓練し、時を過ごした。だが、いくら忙しくしようともぼつかりと空いた穴は塞がらない。常に彼の隣にいた柳瀬はもういないのだ。訓練を終え、戻ってきた小原は待機所の長椅子に腰を落とした。

「小原」

清水中尉が読書を中断し、小原に話しかけてきた。

「はい」

「若い連中はどうだ。使えるか」

「まだまだですよ」

「そうか……」

清水が気を利かせて話しかけてくれたいるのは分かっていった。だが小原はそっけない受け答えしかできなかつた。心ここにあらずだつた。

清水は気まずそうに顔を本に戻していった。待機所に微妙な空気が流れる。

居心地の悪さをかき消す為、小原は懐に入れていた煙草を啜え、マッチで火をつけ、一服する。最近ご無沙汰だった煙草だ。久しぶりに吸うとこんなに辛かつたかな、と思えてきてしまうから可笑しかった。口から離し、どうしようかと弄ぶ。吸う気がしない。

「小原軍曹」

煙草を指に挟んで煙をぼーっと見つめていると、誰かが声をかけてきた。顔を向けると神伍長であった。まだ幼さが残る二十一歳の青年は難しそうな顔をして立っていた。

「どうした、神」

「お元気がないようですので」

率直ないいようであった。小原はそのまっすぐさに思わず苦笑し

た。

「ああ」

小原はまだ長い煙草を灰皿に押し付けるともう一本取り出して火をつけた。その行為を神が怪訝そうに見ていた。

「俺は大丈夫だ。ま、今はちよつと落ち込んでいるが」

「ちよつと、と言うのは語弊がありますよ。小原さん、本当に大丈夫ですか」

神は心底心配そうな顔をしていた。人様からは相当参っているように見えるらしい。

小原の心の隅に情けなさが生まれた。戦隊でも古参組みに入るであろう自分が何をくさっているのだろうか、と。このままでいいのか。自問する。答えはすぐ返ってきた。いいわけないだろう。こんなさまを晒し、あの世で柳瀬が泣いてるだろう。いや、あいつのとだから「貴様、しゃんとせい！」と激を飛ばすか。はたまた「ばあかがつ」と指をさして笑うだろう。

そうはいくか。

殆ど吸っていない煙草を灰皿に押し付けると立ち上がり、小原うんと伸びをした。そして、息を深く吐き、次いで両頬に平手を打ちつけた。ぱんと子気味よい音が待機所に響いた。待機所にいた同僚達はその音に反応し、小原を見やった。

「すまん、ちよつと腑抜けていた。俺らしくもない」

小原は周りの視線を無視し、神に言った。

「小原さん……」

小原の言葉に神の顔が徐々に嬉しそうになっていった。ようやく復活してくれた、と思ったのだろう。

そうだ。今は戦争中だ。こんなこと日常茶飯事なのだ。それに、友が死ぬのはこれが初めてじゃない。

小原は徐々にはあるが、柳瀬がいなくなったことにけりをつけ始めていた。時は人の心を癒す。それは今も昔も変わらない。

「よーし、一丁半人前どもを鍛えてやるか！ 神、手伝え！」

「え、いや、自分もまだ一人前とは……」

「二度の実戦を生き残ったんだ。もうお前は一人前だ。それより若造どもを集める！ 小原さんが直々にB29対策講習をしてやる！」

「は、はい……」

小原は神の肩を抱いて、悠々とした足取りで待機所を出て行った。

「ふ、なんだか元気になったようだな」

小原らが去っていった出入り口を見ながら、清水が言った。同僚達はうんうんと頷いたのだった。

若者達にB29に対抗する手段を模型と神を使って説明し、技を伝授した（もちろん口頭だけでは伝えきれない。あとは本人達が実戦で鍛えるしかない）小原は意気揚々と部屋に戻る途中、大林から呼び出しを受けた。

「小原軍曹、参りました」

無帽の時に行く、約十度上体を傾ける敬礼をして小原は戦隊長室に入った。

「軍曹、君に辞令が来た。階級章を外せ」

入ってきた小原に、大林は言った。その言葉に小原は愕然とした。階級章を外す。それは即ち隊を、いや軍去れということ。俺は予備役に回されるのか。小原はがっくりと肩を落とした。

「あ、いや、すまん言い方が悪かった」

小原の様子を見て大林は慌てて言った。

「どういことです」

「軍曹、いや、今日から曹長だな。小原」

「ということば……」

「ああ。私としてはもう少し早くてもよかったと思うのだが。とにかくだ、小原、君は今日付けで曹長に昇進だ。おめでとー」

大林はそういうと椅子から立ち上がり、階級章を小原に手渡した。
「自分が、曹長ですか」

「ああ。これからも頼むぞ」

「はい」

小原は敬礼。大林も返礼をする。

「以上だ。退出してよし」

「はい。失礼します」

大林の部屋を出た小原は渡された階級章を見やった。窓から見える空に向けて掲げる。

柳瀬、俺は曹長になったぞ。

あの世の柳瀬に向けて心の中で言い、笑みを向けた。

柳瀬に報告した小原は自室へと向かった。

翌日。小原はいつものように同僚らと待機所に詰めていた。

「今日はくるだろうか」

「くるだろう。このところご無沙汰だったからな」

同僚達の会話を横で聞きながら、小原は神を相手に将棋を打っていた。

「神、まだか」

「もう少し……」

神は頭を抱えながら盤上を睨んでいた。状況は神の劣勢。というか、王手一步手前であった。神はあれこれと考えていた。だが、今更どうにもならない。神がどうしようが勝敗は決していた。

「駄目だ！ 参りました、降参です！」

神はとうとう匙を投げた。小原に頭を下げ、負けを認める。

「よし、これで俺の二十二勝だな」

手帳の手書きの対戦表に二十二勝目の白星を書き込む。

「ちくしょう。一度も勝ててない……」

両手で顔を覆い、神はうな垂れる。

「囲碁だといいい勝負なのに、将棋になるとなんでこんなに差が出るんだ」

横で観戦していた清水が言った。

「ふふ、囲碁はともかく将棋は昔からやっていましたからね」
腕を組み不敵な笑みを浮かべながら、小原は言った。

「さすが小原曹長」

清水は手にしていた扇子で盤上をぱんと叩いて言った。

「ははは、曹長ってというのはまだなれてないんでなんか恥ずかしいな」

むず痒さを感じ、頭を掻きながら小原。

「そのうち慣れるよ、曹長」

またも冗談めかして言う清水に、小原は苦笑を返した。

「うーん、なんでだろう。あれがこうなって……」

唸りながら先程の戦いを思い返す神。よくなかった点を洗い出し、研究して対策を練っている。その真面目さに小原は感心する。

「おい、皆！」

と、小原たちが待機所で和やかにしていると、突然隊員の一人が飛び込んできた。第二飛行隊の山岡善二郎曹長だ。

「さつき情報が入った！ 敵襲だ！」

山岡の一言で待機所にさつと緊張が走った。

その直後、ブザーが鳴った。

『情報。敵編隊、目下帝都に向け進攻中。空中勤務者は直ちに攻撃用意せよ』

「出動用意！ 急げ！」

スピーカーの音が終わらぬ前に清水が声を張り上げた。待機所の隊員達は俄かに準備をしだし、三々五々外に飛び出していった。

隊員らが外で整列する間に、三式戦闘機は整備員の手により出動準備を始める。

「まわせ！」

始動車で或いは整備員の手で、三式戦闘機のエンジンが始動していく。辺りに轟音が轟き始める。

それと前後して、大林が兵舎から出てきた。整列する隊員らの前

に立つ。

「敬礼！」

清水の声で隊員らが敬礼する。今日の出勤は十四機。先日の邀撃での損失や、今朝からの発動機の不調などの理由で稼働機数が減っているのだ。白石大尉も先日の出勤で負傷したため、今回は清水が戦隊長を除けば最上級者となる。

敬礼を受けた大林はさつと返礼をすると、

「この際余計なことはもう言わん。各員全力を尽くしてくれ。以上！」

と短く訓示した。敬礼もそこそこに手早く隊員らを散らせた。

「神！」

愛機まで走りながら、小原は隣の神に言った。

「俺達は二機になってしまったが戦いは待ってはくれん。二機で四機の働きをするぞ！」

「お任せください！ しつかりとやってみせますよ！」

神の心強い返事に小原はにやっと笑った。

いつの間にか一人前の面しやがって。

「曹長、お先に！」

そついつと神は走る速度を上げ、愛機に向けて突っ走っていった。あつという間に愛機まで辿り着き、神は搭乗を開始する。

小原が機に近付いたときには既に神は自機の操縦席に納まっていた。

「若いもんはいいなあ。いや、俺だってまだ二十代だ。負けるか」

小原もさつと操縦席に飛び乗った。

「曹長、発動機は快調です！」

前原が小原のバンド締めを手伝いながら言った。

「いつもありがとう！ 行ってくる！」

「御武運を！」

前原と敬礼を交わす。前原が安全圏まで下がったことを確認し、車輪止めを外させ、小原は機を動かす。神を引き連れ滑走路に進出

し、いつものように大空へと飛び上がった。

機が浮いたら風防を閉め、ちらっと後ろを見る。神も問題なく空中に上がったようだ。笑って見せると頷き返してきた。

間もなく小原らは見方に合流した。そのまま隊列を組み、西へと向かって飛ぶ。空中で集合しつつ、地上からの情報に耳を済ませる邀撃隊。敵はいつもの通り、サイパンもしくはテニアンから飛来したB29編隊。数は約四十とのこと。部隊は直ちに高度八千まで上昇、待機する。

今日もこの間と同じように、澄み切った空だ。雲が殆どなく、まるで天国のような美しさである。ここでは、人の怒声も、警報も、何も聞こえない。あるのは発動機の規則正しい音と自分の呼吸音のみ。

小原は風防越しに更なる高空をみやった。紺碧、と形容したらよいのだろうか。青よりもさらに蒼いその色。この先に宇宙があるのだということが納得できるような気がするほどに、深い色であった。じっと見とれていると、小原の横に神がそろそろと出てきた。元に戻れ、と手信号を送る。すると神は“曹長が心配なのですよ”とでも言うように小原を指してしかめっ面を見せていた。どうやらぼけっと空を眺めているところを見られたらしい。ぼつが悪くなつた小原は“俺は大丈夫だ”と胸を叩き、“それより元に戻れ”と再び手信号を送った。小原は大丈夫だということをこれで納得したらしく、神は笑みを見せ“了解”と翼を振り、元の位置に戻っていった。まったく、余計な気遣いを。

小原は神の気遣いに感謝した。少し感傷的になっていた。柳瀬とペアを組んで飛んだあの日を思い出したのだ。あの日も、そして柳瀬が散つた日も、空はこんなにも蒼かった……。

『敵機発見！』

無線電話に飛び込んできた声に小原ははっと我に返った。おいでなすつたB29編隊様御一行。情報どおり四十の大鯨が、群れをなして迫り来る。

部隊の全機がすわと攻撃態勢を取る。B29は高度七千より高くを飛行しているようだ。群れは小原らよりも低い位置にいるように見受けられた。

ジェット気流に乗るB29はかなり速い。見えたと思ったらもうすぐそこまで迫ってきた。

『かぜ1、これより攻撃』

大林が基地に向けて攻撃開始を報告した。戦いの幕開けである。

“分かれていくぞ”

小原は神に手信号で伝える。二機連なっていくよりも時間差をかけて攻撃し、確実に撃墜するのだ。

“了解”

神は片手を上げて了承の旨を報じてくる。そして、神は先程よりももう少し後方に機を流した。

『かぜ1、攻撃』

無線電話から聞こえた大林の声。見ると大林が敵機編隊に向けて突撃をしていくところであった。戦隊長機であることを示す、機体の横に描かれた赤い線と真っ赤に塗られた垂直尾翼。目立つ塗装の戦隊長機は今日も一番槍である。それに続くは清水の三式戦闘機。濃緑色べた塗りの機体が大林機に続いて突撃していく。山岡曹長も僚機を引き連れて突入。計四機の襲撃を受けたB29編隊は、いつものように狂ったような弾幕を撃ち出してくる。弾丸の中をすいすいと抜け、まず大林が編隊右端の敵機を攻撃した。大林は照準機に迫ってくるB29に向け、弾丸を送る。右に二発あるエンジンのうち、内側に被弾したらしく、B29はそこから煙を吐き出した。尾部および下部機銃の追撃を振り切って下方に離脱してゆく大林機。相変わらずの見事な手際に小原は感心しきりであった。

そして、大林が攻撃したB29に対し、清水がやや間を空けて二撃目をかける。B29も必死だ。これ以上やられまいと清水に向けて撃ちまくる。

危ない。

小原は清水が突入して行くのを見ていて思った。その時だ。清水機がB29の手前で黒煙をはいた。がくと機首を下げ、清水の三式戦闘機が墜落していく。

「清水中尉！」

小原は叫んだ。だが、無情にも清水機は立て直すことなく地上に真つ逆さまに落ちていった。発動機がやられたのかもしれない。とにかく、致命傷を受けた清水機は攻撃直前に敢え無く撃墜されてしまった。

「野郎っ」

小原は下方に見えるB29の群れに毒づいた。柳瀬や安藤をはじめとする仲間達、そして今清水をも落とす大鯨の群れ。小原は憎くて仕方がなかった。できることならこのまま蹴落としてやりたかった。だが、と小原はそこで気を落ち着ける。ここで冷静さを欠いたら自分まで落とされてしまう。ぐつと堪えるのだ、と小原は自分に言い聞かせた。なんとか冷静さを取り戻す。

ふと、横に先程まで後方にいた神がやってきた。

「む、神？」

神の顔が激昂したように赤い。激情を抑えられた小原に対し、神は若すぎた。これまでも何機もの仲間を失ってきた怒りが、ここで爆発したのだ。神は小原の方を見た。

“行きます”

神はそういつているようであった。

「待て、落ち着け！」

小原は神に言った。だが、神はそれには目もくれず、B29に向けて降下していった。一本の放たれた矢となり、神が突撃していく。「神め、冷静さを欠きやがって！」

だが、もう今更止められない。神は既に突撃した。後はもう、無事を祈るより他ない。神の三式戦闘機にB29の火線が集中する。突撃したのが神ただ一機だったからだ。はらはらとしながら神を見守る小原。できるなら盾になってやりたい。いや、俺が代わってや

りたい。小原は神を見ながら思った。

と、はらはらしていると遂に神の機が白煙を噴き始めた。

「神！」

小原は叫んだ。

「離脱しろ！ 無理はするんじゃない！」

だが小原の心に反し、神は突撃を続けた。神の機体は次々と被弾しているらしく、時々破片が飛ぶのが見えた。それでも神は諦めず、大林が攻撃したB29に止めを刺さんとばかりに肉迫、攻撃した。この神の決死の攻撃が功を奏した。B29は炎を噴き出したのだ。編隊から徐々に落伍していくB29。そして、そのB29が不意に機首を大きく下げた。それとほぼ時を同じくして、ぱらぱらとB29より落ちていくものがあつた。乗員が脱出したのだ。計五つの落下傘が、空に花開いた。

「神め、やりやがつた」

小原は落ちゆく敵機を見ながら一人ごちた。そして、神の方を見やった。

「あ！」

神の機体もまたさきのB29のように火を吐いていた。しばらく水平に飛行していたが、いつしか力尽き、神の三式戦闘機は先程のB29のように、地上へと降下していった。

「神！ 頑張れ、神！」

叫びは届かなかつた。やがて神の三式戦闘機は小原からは全く見えなくなつてしまった。神は、どうなつたか。恐らく墜落しただろう。絶望的な感覚が襲ってくる。次いで、激しい激情がこみ上げてきた。小原は機内で叫んだ。声にならない声をあげて。

柳瀬も、安藤も、そして神まで！ いったい俺の仲間を何人やれば気が済むんだ！

もはた勘弁ならなかつた。

「ぶっ殺してやる」

ドスの利いた声が漏れた。B29を睨みつけ、小原は標的を探す。

そして、眼に入った最初のB29に狙いをつけた。編隊中央を飛ぶ、胴中央よりもやや後方に、縦に太い白線を描いたB29。それが小原の標的となった。

ぐつと操縦桿を倒し、小原は突撃を開始した。もはや理屈は無かった。小原は燃えるような怒りとともに、B29を目指した。防御火器による弾幕など、もはや小原には見えていなかった。機体が被弾し、激しく揺れ、風防に被弾し、割れ、風が飛び込んできて、小原は気にも留めなかった。視界が不意に赤く染まった。風防に血が飛び散ったのだ。体に弾をくらったらしい。痛みは無かった。小原は忌々しげに舌打ちをした。

見えなくなるじゃないか。邪魔くさい。

弾を食らったことなど、まったく考えなかった。ただ、突撃の邪魔になる程度にしか思わなかった。風防についた血しぶきは大量ではなく、視界に大した影響は無かった。小原はそのまま降下を続ける。B29が迫る。風防いっぱい迫る。

B 公め！

小原は引き金を引いた。弾丸が、B29に機体にあたり、火花を散らすのが見えた。そこでいつもなら機をひねるところだ。だが、小原はそのまま接近を続けた。小原はその時になって、ようやく自分がやるうとしていることに気付いた。

俺は体当たりをする気か。

激昂した心の隅で、冷静な自分がつぶやいた。だが、止める気などなかった。小原は眼を見開き、B29に迫る。ふと、いつかのようにB29の乗員達と目があつた。乗員達は血にまみれた小原の姿を見て、恐怖した。小原にも乗員達が驚き慌てふためく姿が見えた。爽快であつた。

そのまま地獄へ落ちる。

小原はにやつと笑みを浮かべた。そして、次の瞬間、今まで経験したことのないような大きな揺れを体にした。小原の三式戦闘機は、その主翼をB29の胴体部にめり込ませたのだ。

小原は激震に続き、頭に受けた強い衝撃をつけた。急速に視界がなくなり、真っ黒になる。何も感じなくなった。五感が全て塞がれた。何も見えない。何も聞こえない。小原の意識は、そこで途切れたのだった。

真白な空間にぼかんと浮いていた。

「どこだ、ここは……」

小原は周囲を見渡した。雲の中のようにも思えた。

だが、それにしても妙だ。俺は飛行機に乗っていないのに、何で浮いている。訳が分からなかった。しかも、このふわふわとした感覚。本当に妙だ。

『おい、小原』

ふと、誰かが小原を呼んだ。

「誰だ？」

周りを見渡す。が、誰もいない。姿が見えないのだ。気配はする。確かに誰かがいる気がするのだ。だが、見えない。

『俺だよ、俺。忘れてやしないか』

またも声がした。

「その声は」

聞き覚えのある声だ。よく知った者の声だ。それはかつて小原の親友であった男の声だった。

「柳瀬か？ どこだ！」

小原はその名を呼んだ。

『すまんが姿は見せられん』

帰ってきた答えに小原はがっくりとした。だが、

「柳瀬、話せるだけでもいい。俺は貴様に言いたいことがある！」

『それは俺もだ。小原、どうして体当たりなんて』

「それはこっちの台詞だ。貴様が先に体当たりしたのだろうが！」

しかも、それで戦死なんて！ 体当たりしても帰ってくる奴だって

いるって言うのに!」

『それはすまん。だが、俺は生きて帰りたくなかった。申し訳がなかったんだ。色々人に、申し訳が立たないと思っただ』

「それでも……!」

小原はあふれてきた嗚咽をかみ殺す。

「それでも、帰ってこいよ。馬鹿野郎、俺を残していきやがって…

…」

『小原……。すまん』

柳瀬の声から、彼も落ち込んでいることが分かった。小原はぐつと涙をぬぐった。

『小原よ』

「何だ」

『俺は短気だから、極論に走ってしまった。だが、お前は違うだろ』
「何言ってる。貴様とどっこいの短気野郎だぞ俺は」

『だが、俺よりは冷静だ。いいか、小原。戦いはきつと、これからも続く。短気に走るな。冷静に、お前らしい冷静な判断で戦い続けてくれ。それで、先に逝つちまった俺の分も戦ってくれよ。な?』

「柳瀬……くそ、苦しめつてのか」

『そうだ。だが、お前は戦闘機乗り。戦えと言われている間は、戦え。ただし、短気に走らないように』

最後の方はぼんやりとしか聞こえなかった。小原の気配が徐々に薄くなつていく。

「小原……!」

『すまん、時間切れだ。じゃあ、小原。生きるよ』

「柳瀬、待て!」

柳瀬の気配が急速に消失していく。そして、小原の視界も徐々に真っ白になつていく。まるで霧が濃くなるかのよう。白い世界が真っ白になる。白だけで、何も見えなくなる。小原の視界は、完全に塞がった。自分の姿も、見えなくなつた。

気がついたら強い風を受けていた。小原は周囲を見た。真つ逆さまに落ちている。

どうなっているんだ。ここはどこだ。

混乱していると、不意にぐつと上に持ちあげられるような感覚を受けた。そして、鈍い衝撃。今まで逆さだった世界が、元にもどる。なんだって言うんだ。

小原は上を見上げた。白いものが開いていた。落下傘だ。見上げると同時に肩に激痛が走った。痛むところを見ると、血が滴り、飛行服を濡らしていた。その痛みで、小原はすべてを思い出した。

そうだ、確か俺は体当たりをしたはず。

だが、その後のことはまるで記憶にない。激突した瞬間、投げだされたのか、はたまた無意識のうちに脱出したのか。とにかく、奇跡的に助かったということだけは分かった。そう、小原は生き残ったのだ。

「俺だけ、か」

小原は眼下に見える田園風景を見ながら呟いた。

もしかしたら、柳瀬が生かしてくれたのかもしれない。何故かそんなことを考えた。どうしてか、小原には分からなかったが、とにかくそんなことを考えてしまった。

「く、頭を打ったみたいだな」

額が激しく痛んだ。どうやら計器盤か照準器にぶつけたみたいだ。

「くそ、肩の痛みより始末に悪いな……」

額を抑えながら、小原は言った。間もなく地上だ。地面はもう、すぐそこだ。

「生きる、か」

柳瀬にそう言われた気がした。生きて自分の分まで戦え、と。そんな話、した覚えはないのだが。

まあ、いい。そうするさ。これからも戦ってやる。死ぬ気で、しかし死なない程度に。

小原は迫る地上を見ながら、思ったのだった。

その後数週間、小原は病院に入ることになった。肩を怪我したことは知っていた。原因はB29から撃ちだされた弾だと思っていたが、どうやら破損した愛機の風防の破片が突き刺さったらしい。どちらにしてもしばらく肩は動かなかったが。それから、打ちつけた額のほうだがこちらは大したことはなく、氷水で冷やされただけだった。予想外だったのが、右脚が骨折していいことだった。おかげで地上に降り立った時、ものすごく痛かった。

「ちくしょおお！」

落下傘降下した畑の上で、転がりながら小原は叫んだのであった。そんな小原を助けてくれたのが、なんと撃墜された清水中尉だった。清水は小原の降り立ったすぐ近くに機を不時着させていたので。飛び去るB29を眺めながら愛機に寄り添い煙草をくゆらせているところに小原が降りてくるのが見え、駆けつけてくれたのだ。そして清水は地面をのたうつ小原を見て笑いながら、助けてくれたのだ。小原はその後、近くの民家に運ばれ、清水が借りたりアカーに乗せられて近くの基地まで搬送された。そして、そこから病院へトラック送られたのだった。清水は無傷だったので、別のトラックで調布基地に帰ったという。

さらに驚くべきことが病院であった。なんと神伍長も生きていたのだ。彼は火を噴く愛機から落下傘降下し、生還したのだ。ただし、地上に降りたときに足を折ったらしく、小原の隣のベッドと一緒になって静養する羽目になった。

「お前はカツとなるからいけないのだ。もっと冷静にと日頃から言っているだろう」

隣のベッドの神に、小原は言った。

「小原さんこそ。聞きましたよ、体当たりしたって。それで冷静でいるなんてよくまあ。人のことを言えないではないですか」

「なんだと、貴様言うようになったな。退院したら根性入れ直してくれる」

そんなやり取りをしながら、二人は病院生活を送った。

小原が退院してからはしばらくして、B29による空襲が激しさを増した。中でも小原が退院してから数カ月後に行われた夜間空襲はすさまじく、雨霰のごとく投下された焼夷弾により、帝都は正に灰燼に帰したのであった。また、硫黄島陥落によって戦闘機の護衛まで付きはじめ、小原らの活動は大きく制限されてしまった。それでも小原は神とともに空を飛び続けた。戦って、戦って、戦い続けた。それが彼の使命であるから。

そして、小原が体当たりをしてから半年が過ぎようとした、夏のある日。

「戦争が終わった」

その日、大林は重大発表があるといって隊員らを集めた。そして集まった隊員らを前にして、大林は言ったのだった。

戦争の終結。日本の敗北。その言葉を聞き、隊員らは涙を流した。小原と神も、肩を抱き合って大粒の涙を流した。苦しさを乗り越えて、ひたすらに戦い続けてきた。なのに、その苦労はとうとう報われることはなくなってしまうのだ。

「柳瀬、終わっちまったよ」

愛機から目をそらし、小原は空を見上げながら呟いた。高空を、飛行機雲を引きながら飛ぶ機が見えた。B29の偵察型F13であろう。だが、もうあれを追うこともない。小原の戦いは終わったのだ。

「小原さん」

神に呼ばれ、小原は振り返った。

「武装解除の手伝いをしてくれと、前原が」

「ああ」

小原は命令により武装を解除され、プロペラを外された戦闘機を見やった。雄々しく美しい姿をしていた三式戦闘機たちは、なんとも寂しい姿へと成り果てていた。だが、命令は下った。戦いは終わった。矛を収めよ、と。小原は従わなくてはならない。それが軍人だからだ。命令は、絶対である。

変わり果ててしまった、もう飛ぶことのないであろう愛機を見、小原はまたも涙を流した。

その日、八月十五日。太平洋戦争は終結した。幾多の空の勇士達の活躍も虚しく、日本は敗北したのであった。

晴れた日に、空を眺めると、そこには無限に広がる蒼き大空がある。この空で、かつて多くの若者が、その命を散らせていった。もはや、誰も彼らの息吹を聞くことはできない。

幾多の命を吸った空は、血に染まることなく今も蒼いままである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2001t/>

蒼空の息吹

2011年5月17日23時55分発行